

大学^准教授が
マッチング
アプリに挑戦し
てみたら、
経営学から
経済学、
マーケティング
まで学べた件について。

東京都立大学准教授
高橋勅徳

クロスメディア・パブリッシング



はじめに

はじめまして。高橋勅徳と申します。

東京都立大学で経営学（企業家研究）を担当する准教授を勤めています。新聞や雑誌、ネット上でも大きく取り上げられたので、『婚活戦略：商品化する男女と市場の力学』（中央経済社）の著者だと言ったほうが、今では通りが良いかもしれません。

この本『大学教授がマッチングアプリに挑戦してみたら、経営学から経済学、マーケティングまで学べた件について』は、今や男女のカジュアルな出会いから真剣な婚活に至るまで、多くの人が日常的に利用しているマッチングアプリを題材に、ビジネスの世界の基礎教養－経営学・経済学・社会学の知識を学んでいける本がコンセプトになっています。

2022年度の人口動態調査では、16.8%の男女がマッチングアプリを通じて出会い、交際や結婚にたどり着いていると指摘されています。この16.8%というのはあくまで「実際に交際や結婚できた人」の数ですので、実際にマッチングアプリを利用している人は、もっと多いでしょう。

地味でおとなしい印象のある東京都立大学ですら、私のゼミ生の約半数が（積極的に利用しているかどうかは別ですが）スマホにマッチングアプリをインストールしていたりします。

もはや、マッチングアプリの利用というのは、恋人を見つけ、

結婚をするという私達の日常で「使って当たり前」の現実なのではないでしょうか。

さて、私は婚活の経験を赤裸々に記述しつつ経営学の持つ独自の視点から切り込んでいく書籍に『婚活戦略』というタイトルを付けました。これは、敬愛する社会学者であるピエール・ブルデューの『結婚戦略：家族と階級の再生産』（藤原書店）から借用したという、分かる人だけ分かるパロディであるのと同時に、自分自身が婚活をしている最中に情報収集で読み漁っていたマニュアル本やネット上の記事で「戦略」や「マーケティング」という用語が溢れていたことも理由でした。

「戦略」や「マーケティング」といった経営学用語のみならず、マッチングアプリでのメールのやり取りや実際のデートの場で「異性にモテるため」に社会心理学や金融工学、行動経済学を折衷して「恋愛工学」と名乗る独自の体系が流行していたりして、突飛な論理展開に仰け反りつつも、興味深く「みんなモテるために、色んなことを考えるんだなあ」と、ある種のエンターテインメントとして楽しんでいました。

この経験から「みんなが体験する日常的経験」を「学問の視点」から「エンターテインメント」として提供していくことが、（拙いながらもある程度経験と実績を重ねてきた）研究者としては大事だと考えていたところに、本書を執筆するという貴重な機会をいただきました。

結婚適齢期の男女は、ビジネスパーソンとしてこれからの社会を支える人たちでもあります。

そして、現在の結婚適齢期の人たちにとってマッチングアプリは日常的なもので、それこそ「戦略」や「マーケティング」として婚活を考え、恋愛工学を通じて行動経済学を始めとした様々な学問をエンターテイメントとして触れているのです。

そんなことを考えているときに、今から脂の乗るビジネスパーソンの方々にとって我が事である「マッチングアプリ」を題材とした、ビジネスの基礎教養といえる各種理論をエンターテイメントとして学ぶことができる企画で本を書かないか、というオファーを頂いたわけです。

しかし、その道に邁進してきた研究者が、その時代の魅力的なコンテンツの力を借りて、基礎教養を啓蒙していくというのは、逆に読者から倦厭されてしまうかもしれません。

なにより、『婚活戦略』で赤裸々に自分の経験を記述してきた私自身が、婚活をテーマにして単なる啓蒙書を書くことはできません。

だとすれば、よりディープにマッチングアプリを利用した婚活の現実を描きつつ、シームレスに学問の面白さ・奥深さを学ぶエンターテイメントとして本を作れないか。しかもある程度はアプリ婚活にも役立つものを……と試行錯誤していく中で、一見、実体験に基づく私小説か婚活ルポタージュとしても読める本として、本書は完成しました。

本書の主人公である研究馬鹿のYamaguchiさんが、婚活戦士として悪戦苦闘していく様を楽しみつつ、彼の思考の背後にある様々な学問の深淵に少しでも触れていただければ幸いです。

はじめに	3
プロローグ 結婚≠幸せ?	11
結婚式の帰り道で	12
私の経験値、低すぎ……?	15

なにかから始めるべきか……	22
目に見えない婚活メカニズム	25
価値のないプロフィールと私	28
価値ある男への冴えたやり方 ~マーケティング応用編~	31
Check ▶ マーケティングとは?	33
出会うまで、あと2万円	34
星野源になりたい	38
女性と出会うため、まずは数百万円を用意します	40
モテたいのか、結婚がしたいのか ~市場の細分化編~	45
Check ▶ STP分析とは?	48
私の武器、それは収入	49
アーリーアダプターに刺さる男	51

Check ▶ キャズム理論の補足	53
婚活の青い海、そして野望	54
たった一人に向けてチューニングする	58
メッキが剥がれていく音がする	60
Check ▶ テクノロジーの変化とマーケティングの個別化	63

第2章

予想通りに不合理な婚活

行動経済学編

話が長続きしない件について ～マーケティング的アプリ婚活の落とし穴～	66
予想通りに不合理な恋愛	69
Check ▶ 行動経済学のひろがり	71
「今しか会えない私」の作り方 ～プロスペクト理論編～	72
Check ▶ カーネマンの実験	76
高級スーパーの値付け理論 ～アンカリング効果編～	77
メシの写真の力は偉大 ～ナッジ効果編～	81
始めたからには止められない ～サンクコスト編～	85
3回目の壁にぶつかる	88
Check ▶ サンクコストがミスを誘導する	90
いつから錯覚していた？	91

理論武装の敗北	96
Check 組織は戦略に従う	98
マーケの終わり、経営の始まり	99
競争優位の作り方	104
数撃ち当たるは、正しかった	108
広すぎる属性と狭すぎる趣味	112
選んでいるのか、選ばれているのか?	115
選ばれる自分探し	117
10行に収まる我が人生	120
有象無象の中に消える、私のいいね ～弱者のアプリ戦略編～	124
説得力が足りない!!!! ～新奇性のジレンマ編～	130
「アプリの土俵で戦わない」選択 ～正統派戦略編～	133
Check 正統化戦略とは?	137

取材を受けてくる	140
情報を更新するたび、価値観の合う人が増えていく予感	142
何かがおかしい	146

AI女と会ってみる ～マッチングアプリの闇～	149
Check 「婚活」の社会学	151
深淵を覗くとき、深淵もまたこちらを覗いている	152
Check テレクラからインターネット、援交からパパ活へ	155
女性の市場と男性の事情	156
アプリ女性は、自由恋愛の夢を見るか？	159
罪悪感と経験値不足	162
Check 恋愛格差と結婚	166
言った。	167
Check ロマンティック・マリッジ・イデオロギー	169
エピソード マッチングアプリ、学びが深すぎるだろ!	171
おわりに	178
参考文献	183

ブックデザイン
krran(西垂水敦+松山千尋)

製作
荒好見+内山瑠希乃

装画・中面イラスト
ケント・マエダヴィッチ

校正
株式会社 RUHIA

プ
ロ
ロ
ー
グ

結 婚 ≡ 幸 せ ？

結婚式の帰り道で



Yamaguchi

2022年3月19日



今日、大学院時代からの友人の先生の結婚式に出席した。
よく考えたら、結婚式に出たこと自体が初めてだった。

私も今年で35歳になる。大学から大学院に進学し、博士号を取得して就職したのが28歳の時。多くの大学でポストのある「経営学」という学問上の都合もあるが、大学から大学院を経て、ストレートで研究職のポストを得ることができたのは、我ながら幸運だったと思う（同じ年に就職した他分野の先生は、40歳を過ぎて初めて常勤のポストを得た人だった）。

「次は、お前の番だな」

新婦と幸せそうに並ぶ友人に挨拶に行った時、そう言われた。なんでも、私の座る席は新郎新婦の友人のうち、未婚の男女を集めたものらしい。結婚式ではよくある、新郎新婦側からの配慮だということだ。ちょっと余計なお世話な気もするが…。

「そうか、私たちもそういう歳なんだな……」

「グズグズしていたら婚期を逃すぞ。お前もそろそろ、自分の幸せを考えても良い頃なんじゃないか？」

「私も幸せになれるのか……」

「何言ってるんだよ」と笑いながらツッコミを入れる友人を見ながら、自分の人生にも「結婚」というイベントがありうること。「結婚」が幸せを得る一つの手段なのだという事実に気づかされた。

彼が言う「自分の幸せを考えても良い頃」という言葉も、妙に私の心に響いた。幸運にもストレートで大学教員という職業に就いたこともあり、その幸運に応じて研究と教育に全力を注ぐのが、自分の責務であるように、ずっと考えていた。

いや、よく考えれば「自分の人生」に、私はあまりにも無自覚であったかもしれない。中学、高校、大学と勉強するのが自分に与えられた義務だと考えてきた。大学院に進学してからは、その勉強が研究に置き換わっただけだ。その義務をこなしている限り、自分の存在が許されると思い込み、結果が出るほどに安心していた。

その結果、生活のほとんどの時間を研究と学務に費やし、趣味らしい趣味もなく、長らく恋人がいないどころか「作ろうとさえ思わない」という生活を続けてきた。確かに、第三者的に見たら「自らの幸せを考えてもいい」生き方だろう。

そもそも、自分が幸せを感じる瞬間が、執筆した論文が学術誌に掲載が決まった時だけというのは、普通ではないのかもしれない。

結局「女性と結婚すること。幸せになるということ」について考え込んでいるうちに、結婚式で同席した女性たちとまともに会話することもなかった。

せっかくの席を用意してもらったのに申し訳ない……。

そもそもこれまで、異性とのコミュニケーションの全てを、研究活動の効率性を低下させる「厄介事」として、排除してきたのだ。多くの男性がおそらくは思春期のうちに学習する「異性と対話していくことの楽しさ」を私は知らない。

だから、結婚が幸せにつながるということは、一般論としては知っていても、どういうことなのか理解できない。

そもそも、「恋」とか「愛」とかって、なんなのかすら、よく分かっていないのだ。

結婚しない、という選択肢も受け入れられている現代だ。ただそれは「その人の幸せ」を考えた上での選択であるべきで、自分自身の幸せに無頓着な私のこの状況はあんまり健全ではない気がした。

「結婚……か」

たくさんの引き出物をぶら下げて帰宅している電車の中。

ふとそんなことを思った35の夜だった。

私の経験値、低すぎ……？



Yamaguchi 2022年3月27日



女性と出会い、付き合い、結婚をする。

友人の結婚式に出てから、私の頭の隅に常にその言葉があった。

正直に言って、よく分からない。よく分からないから、それが何かを理解したい。ある意味、研究者の性だろう。

それこそ他人から見れば「何を言ってんだよ」という悩みかもしれないが、「普通の人なら自然に受け入れられることを、ちゃんと理解するまでは受け入れられない」から、研究者という難儀な道を選んでいるのだ。

とはいえ、「恋愛」や「家族」や「幸せ」が何であるかを議論するのは、それこそ哲学の領域だ。哲学的な問いを体系立って学んでいっても、それこそ論文が一本増えるだけで、友人が言うところの「幸せ」にはたどり着かないだろう。

一週間ほど思索を巡らせた結果、やはり経験してみるしかないという、結婚式帰りの電車の中での思いつきに、再度たどり着いてしまった。

さて、何にしてもまず私と結婚してくれる相手と出会う機会がなければ……。

当たり前のことだが、そこから既にどうすればよいか分からない。まあ分からないことは、調べて学べばいい。それは私の得意分野だ。

まずは書店に向かってみた。

今まで近寄ったことがない「恋愛・結婚」のコーナーに行くと、どれを選んでよいか目眩がするほど多くの本が出版されている。どうやら現代では、恋人を求めて活動することを「婚活」、配偶者を求めて活動することを「婚活」と言うらしい。

ひとまず、男性向けの「婚活」指南書について、目に付く本を十数冊まとめ買いしてみた。

店員からの視線はやや気になったが、背に腹は替えられない。

というか、普段使わない書店で買えば良かった……。

「なんで、こんな非論理的かつ、効果が検証されていないことを、成功マニュアルとして断言できるんだ？」

私は一冊読み終えるたびに、書籍を「もう読まない本（有害）」を収める本棚に封印していった。

正直、これらの本が「何を言っているのか分からない」と困惑するだけじゃなく、「何を根拠にこんなことを言えるのか？」という怒りも湧いてきた。

本の内容は、婚活で女性に接する際の心構えや、女性ウケの良いファッションやコミュニケーション方法など、内容は多岐にわ

たっている。

しかし、学術の世界で生きてきた私から見ると、執筆者の経験則を元に執筆されており、率直にこれを実行に移すのは問題アリに思えた。

※これらの書籍の著者は、結婚相談所の社長やカウンセラーを名乗る人が多い。知名度を上げるために、わざと過激なことを書いているのではないだろうか？

彼らにとっては経験則から導いた最適解なのかもしれないが、理論も体系も存在しない。

いや「婚活は理屈じゃない」と言われたらそれまでだが、「これだ!」と確信を持てるモノがないとどうにも腰が重くなってしまふ。だから研究者をやっているわけで……。

書籍だけでなく、web上でも婚活に関する情報を漁ってみると、だいたいはまとめ買いした書籍に書かれた内容と同じで、限界を感じ始めたところで、唯一、納得して読めたのが「婚活」という概念を生み出した書籍である、山田昌弘・白川桃子著『「婚活」時代』（ディスカヴァー携書）だった。

家族社会学者が手掛けたこの本は、お見合い結婚から恋愛結婚への変遷、出会いの機会の現象と長期の不況と晩婚化の関係について、大規模な調査に基づいて明らかにし、「婚活」を勧めていく必要性を説く展開に納得するだけでなく、迫力すら感じた。

若干、女性との出会い方、とは違う気がするが今は気にしない。

いわゆる「婚活研究」と言われる研究分野があることを知り、

関連文献を読み進めていくうちに、ある一節に注目した。

「女性が高収入の男性を配偶者として捕まえる活動」（関口, 2010, 155-156頁）

これは……！

結婚適齢期の日本人男性の平均年収は400万円程度であると言われている。

幸いなことに私は大学准教授の職を得ているので、その平均額の倍の年収を得ていた。35歳と結婚適齢期としてはかなり終盤に該当するようだが、収入という面で見れば女性と出会うことは決して不可能ではない……？

山田先生らの調査研究を見る限り、我が国の女性が結婚相手に求めている要素の一つに、恋とか愛といったよく分からないものではなく、「**経済力のある男性**」というものがあるらしい。少なくとも、「惚れさせる」とか「モテる」とかあやふやなものより、**この一文の方がはるかに信じられる理論**であるだろう。

というかここくらいしか私には活路が見出せない。

ただ婚活研究は結婚するために「出会いの機会を増やす」ことの重要性は指摘していても、そのために「どうすれば良いのか？」については具体的な方策は書かれていない。

その方策こそ、マニュアル本がメインにしている「ファッション」とか「会話術」なのかもしれないが、それは問題と解決策の

関係がズレている気がした。

マニュアル通りに女性受けの良い格好をしても、駅前に立っているだけでは出会いの機会にはならない。そもそも、どうやって女性と出会うのかを考えなければならないのだ。ファッションや会話術は、「出会った後」の話でしかない。

それならば。理論もマニュアルもないなら……。

私がこれまで蓄積してきた学識を総動員して婚活という現象に挑戦してみるのはどうだろうか。要はフィールドワークだ。研究するように婚活する。

そして、願わくば生涯をともに歩めるパートナーを見つけるのだ！

※関口文乃（2010）「婚活ブームの二つの波：ロマンティック・ラブの終焉」山田昌弘（編）『婚活現象の社会学』東洋経済新報社,pp. 121-160.

コメント



たにし

大学の先生なら、贅沢しなければ結婚できるんじゃない？



kakky

自分で「婚活を経験しながら理論を作る」って、なかなか難しそう。今後の経過報告を期待してます。

